

第2項 コミュニティの教育力の変遷

第1項では、家庭の教育力が、被調査者が若者であった頃よりも相対的に低下してきていることを示した。第2項では、被調査者が若者であった頃の、家族以外の地域の大人と若者との関係、現在の被調査者と若者の関係について比較検討していく。

インタビュー結果を概観すると、被調査者がかつて若者であった頃は、地域の大人が、その若者を知っていようがまいが、彼（女）らの逸脱行動に対して注意していたようである。ところが現在は、逸脱行動をなしている若者が以前からの知り合いであった場合は注意できるが、そうでない場合は、異端視しながらも放任してしまうようである。このような点について、以下、Scene.3-12、Scene.3-13 のインタビュー結果を具体的に見ていく。

[Scene.3-12] グループ4

S2：そういう地域の行事に中高生が参加できるような場所を作ってくれば、大人だって「あれはどここの誰ちゃんだ」って分かるようになるから、そこらへんでどこかの子どもが悪いこととしても、「なんだお前そんなところで！」って注意もできるのよ。だから、顔が分かれば…。

S1：顔が分かっただけに注意できない。外部から入ってきた子なんかには仕返しされたら大変とか考えちゃうから。今じゃ、テレビとかでもやってるじゃない、注意したら刺されたとか…。こっちが集団でいればできるかもしれないけど、何されるか分からないし…。地域の子だって分かれば注意もできるんだけど。

R1：注意できる大人が少なくなったということに関しては、どう思いますか？

S2：交流もないから注意もできないっていうのはあると思う。

R1：さっきも言ってた「頑固オヤジ」みたいのは全くなってしまいましたか？

S1：なんだか、大人の方がものわかりが良くなっちゃたのかな。

S2：というか、昔は注意しても、「あそこのおじちゃんに怒られちゃったんだよ」って言っても、「そうかそうか、お前が悪いんだからしょうがない」って親もそう言ったけど、今は、逆に、親が怒って「まったくあそこの家の親はあんなこと言ってどうのこうの」って、大人としての隣近所の付き合いが気まづくなっちゃう。そういうのがあるから、へたに注意はできない。そういうのが大きいかな。

S1：今じゃ、「誰々ちゃんは～」なんて言ったひには、その親が黙ってないからね。本当に注

意できない。

S2：そうね。

[Scene.3-13] グループ9

R：昔はよくそう言う風に叱られたりとか、昔ご自分がお若かった頃と比較してみたいんですけど、どうですかね。

S2：昔って、近所のおばさん達みんな悪いことしたら怒りましたよね。でも今の子っていうのは、やっぱり知ってる子はあれだけど、見て見ぬふりするおばさんもいるし。あとみんな今の若いお母さん達って子ども怒るのに、「なんとかちゃんだめでしょ」って「ちゃんづけ」で怒ってますよね。でも昔ってみんな呼び捨てで怒ったりしてたから、ああ甘いんだなあっていつも思ってるんですけど。

S1：親に怒られていない子どもが近所のおばさんに怒られても、言うこときかないですよ。親に小さい頃から言われてなければ、怒らない親が多いし。

S1：そう。

Scene.3-13 の、「昔って、近所のおばさん達みんな悪いことしたら怒りましたよね」という発話にあるように、以前は、地域に暮らす親以外の大人が若者の逸脱的な行動に対して注意をしていたことが分かる。しかし、現在、地域の若者の逸脱行為に対して大人が注意をしているかというと、そうではない。このような傾向は、Scene.3-13 の「(昔に比べて) 見て見ぬふりするおばさんもいる」という発話にも示されている。以前に比べて、地域の逸脱行動をなす若者に対する大人の対応に変化があることが見てとれる。

こうした変化が生じる原因として、地域における大人と若者との関係の変化が挙げられる。それは、同じ地域で暮らしているにも関わらず、相手がどこの誰か分からないという問題につながる。そうした若者に対しては、「顔が分かってないだけに注意できない」(Scene.3-12) のである。さらには、「外部から入ってきた子なんかに仕返しされたら大変」とも考えている。また、若者を「注意したら刺された」(Scene.3-12) といったメディアを介した報道も、見知らぬ若者に対する危機感を助長することになっている。

また、Scene.3-13 の「親に怒られていない子どもが近所のおばさんに怒られても、言うこときかない」、「『誰々ちゃんは〜』なんて言った日には、その親が黙ってない」にみられるように、

たとえ注意しても、その注意が効果をなすか否かについて疑問を呈している。

以下では、まず、被調査者が若者であったとき、逸脱的な行為をなす若者に対して、親以外の地域の大人がどのように対処していたかについてみていく。そして、現在、大人が地域の若者の逸脱的な行為に対してどのように対処しているかについて示しながら、社会の教育力の変遷について具体的に検討していく。

1. 以前のコミュニティにおける教育

ここでは、被調査者が若者であった際、逸脱行動を犯した場合、家族以外の地域の大人がどのように対処していたのかについて検討していく。具体的には、被調査者が若者だった頃、家族以外の地域の大人がどのような行為に対して叱責や注意をしたのかについて言及されている箇所を Scene.3-14～3-17 にまとめていく。

[Scene.3-14] グループ 1

R：ご自身が学生の頃って、近所にどんな人が住んでるとか、知ってました？

S2：どこの誰って分かったたよね。村じゅう知ってたから。なんだったって分かった。

S1：分かるよ、俺だって村じゅうだもん。「あー、どこどこのせがれ」とかさ。「どこどこのトルちゃん」とか、苗字じゃなくて下の名前で、みんな村じゅう分かったた。だから、村中から監視されてた。

S2：そうだね、村じゅうで育てられたっていうのはあるわね。

S1：悪いことすると、村じゅうから叱られた。

[Scene.3-15] グループ 8

S1：怒られたね。悪いことすると誰でも。近所の年寄りだってこわい

S3：昔はね、家族も子どもの数も多かったし、その個室自体がね、自分の部屋もなかった。無かった人が多かったでしょ。だから目が届くでしょ。

S1：で、地域の年寄りがこわかったでしょうな。

S2：うーん。

R：やっぱり、怒られたりしました？

S1：そうそう。遊んででても危ないと「危ない」とか、大きい子が小さい子をいじめちゃいけないとか。ほら、長老が。その地域の長老が、怒ったものよ。そういうの見てて

R：今はいませんものね。

S1：もう。

S2：今はほとんどね、いない。

S1：今の年寄りの方が遠慮しちゃって小さくなっちゃって、いない。

S2：そうそうそう。いないですよ。逆に良くないのかもね、そういうのが。

S1：昔は良かったよね。年寄りを尊敬するってのがなくなったでしょ。

R：だからきっと、オートバイの子らも、年輩のおじいちゃん、おばあちゃん世代の人に言われるときんですよ、きっと。

S1：だから、また言うのは、今の人は学校出て、あの、ほら、理論的には何でも年寄り越えているかもしれんけど、人生は私らが先輩なんだよ。人生長くやってんだ、人生長くやってんだよってこと。それが今、年寄りみんな遠慮してるでしょ？

R：あつ、じゃあ年輩の方が遠慮しちゃってる？

S1：そうそう、そうだと思うなあ、実際、私が実際にそうだもん

[Scene.3-16] グループ 2

R：昔は、近所に頑固ジジイ、頑固ババアみたいのがいて、いたずらすると怒られるみたいのはありましたか？

S2：いたいたいた。

S1：私悪ガキだったから、よく怒られた。

S2：昔は学校のそばにお店があって、そこのおばちゃんがけっこう、そんな感じだったかな。そこのおばちゃんはうるさかった。

S3：学校に行く途中にほうきを持って立ってて、「おはよう」って言わなかったら怒られたもん。

R：今はそういう人っていますか？

S2：今はいないよね。昔はそういうのがあったから、悪いことはできないってのはあったかもね。

S1：いないね。

「Scene.3-17」 グループ 6

R：近所の目みたいのは大きいですか？

S3：今はそういうのが薄くなっちゃってるよね。隣近所でみても、注意しない。

R：昔は注意しました？

S3：昔は、私はされた。

S5：田んぼに石を投げちゃダメだとか、怒られた。あぜ道を歩いただけで怒られたとか。

S3：近所の人は、怖い人いたよね。必ず怒るおじさんみたいなのが。

「村じゅうで育てられた」(Scene.3-14)、「昔はそういう（悪いことをしたら近所の大人に叱られる）のがあったから、悪いことはできないってのはあったかもね」(Scene.3-16)にあるように、被調査者が若者だった頃は地域の大人の「眼」があり、若者に対して叱責したりする機会も多かったことが分かる。

また、地域における大人と若者との関係は、「どこの誰って分かった」(Scene.3-14)というように、その若者や子どもが、どこの親の子どもであるかが知られていたようである。そうした関係が背景となって、「悪いことすると、村じゅうから叱られた」(Scene.3-14)り、「悪いことすると誰でも怒られ」(Scene.3-15)ていたようである。

そして、かつて若者であった被調査者もまた、「地域の年寄りがこわかった」(Scene.3-15)、「そこ（学校に行く途中の家の）のおばちゃんはうるさかった」(Scene.3-16)、「必ず怒るおじさん」(Scene.3-17)等、地域の大人に対して、「こわい」、「うるさい」、「怒っている」等の共通した印象を有していたことが分かる。つまり、そこには叱る大人の社会があり、地域の大人の叱責が若者の逸脱行動の抑止力として作用していたのである。

2. 現在のコミュニティにおける教育

これまで述べてきたように、被調査者が若者であった頃、コミュニティにおける親以外の大人は、若者の行動に対して、意見を言ったり叱ったりしていた。では、被調査者が大人となった現在、地域の若者の逸脱的な振る舞いに対して、どのように対処しているのだろうか。

以下、Scene.3-18～3-21 に示すインタビュー結果から検討していく。

[Scene.3-18] グループ 9

S2：うちなんかは、子どもの友達なんかは言えるけど。息子の友達の親御さんなんかの話しても、その子の家で溜まってタバコを吸ってるのを見つけて、ぶん殴ったっていうのも聞かし。

S1：そうね、知ってる子だったら言えるけど、全く知らない子には言えないわね。学校なんかでも、「学校に連絡ください」って言うもんね。だって、今の子って体格も大きいし、そんな子が暗がり吸ってたりしてそれを注意しても、何されるか分からないから、「学校に連絡してください」って…。

R：怖いですか？

S1：うーん、でも、知ってる子だったら言う。「吸ってるの？」って感じで。

[Scene.3-19] グループ 9

R1：コンビニの周辺でたむろしてるとかぐらいだったら、許容できる範囲だと思うんですけど、例えばどのへんの行動というか、具体的にどういうことをしたらちょっと注意した方がいいな、と思われますか？

S2：注意したくても注意できないですよ。子どもかなんかに仕返しきたら怖いと思うし。結構そういうの聞くんですよ。なんか自治会なんかでも注意すると、その家に卵投げにきたりとか。そういうの私たちのところにくるならいいんですけど、子どもに来ちゃったら、子どもがこんどなんかの時に学校行くのいやだとか言われちゃうと、もういやだし。だからみんなタバコとか吸っていても、見て見ぬ振りしちゃうとか。注意したいんですけど、怖いかなとか。

R2：ああ、逆にそういう子に注意することによって自分の子に危害が及ぶという…

S2：自分家の子守りたいですもんね、母親としてはね。本当は注意しなきゃいけないんですけど、みんなそういう風には言ってますよね。

R1：例えば、よく知っている子どもとか、隣近所によく知っている子どもがいて、その子がタバコ吸っているのを見たりだとか、ちょっと悪いことしたりというときにはどうでしょうか。

S1：タバコ吸っているくらいじゃ今注意する人あんまりいないですね。

S2：家で吸っていたら「ダメだよ」とか言えるけれどね。

S1：外で吸っていても言わないんじゃないかな。

S2：高校生なんかもう平気でタバコ吸って歩いてますもんね。

[Scene.3-20] グループ 6

S4：親が今、近所付き合いをしない人が増えてるよね、そうすると、近所付き合いしてるいと、あそこのうちは中学生の子がいるとか、高校生の子がいるとかあるけど、「何年生になったんだろう？」とか、極端になると「あそこは子ども何人いたっけ？」みたいな感じになってくると、注意どころじゃよね。

S1：どこの誰ちゃんだか分かんないんだもんね。

S4：だから、目のあるところっていうのは、目の届いてる間は大丈夫なんだよ。目が届かなくなると…、だから、中学生のうちは、もうみんな、田舎だから分かるんですよ、「あの子は誰」「親は誰」っていうのが、分かってるから、子どももそうは悪いことはできないよね。

S2：うん。

[Scene.3-21] グループ 12

S1：中学生で（タバコを）吸っていたら、よほど荒れてる子の場合。よほど痛めつけられて、反抗してるっていう子しか吸ってないと、思う。

S4：いるよ。

S3：隠れてんのかな。

S1：高校生は、吸ってる子でも荒れてる様子ではないし。ちゃんと灰皿につて。

S2：体に毒やなとは思うけど。

S3：（言っても）聞かないし。親も言ってるやろうし。

S1：知ってる子はするけど。中学生だったら。痛々しくて。声かけてあげたいかな。

S2：知らない子には言えんわ。

S1：高校生は、吸うならちゃんと灰皿もって、隠れて吸えよって。

S1&S2：知らない子には言われんわ。

S3：言われんわ。

かつて、若者は家族以外の大人からも、地域ぐるみで教育を受けてきた。しかし、現在の大

人は、かつてのこわくて、うるさい、怒っているおじさんやおばさん（第2項参照）と同じ立場をとってはない。逸脱行為をなす若者への対処方法の特徴は、「知ってる子だったら言えるけど、全く知らない子には言えない」（Scene.3-17）という発言に集約される。同じ意見は、Scene.3-19の「隣近所でみてても、注意しない」という発言、Scene.3-20の「（喫煙している若者に対して）知ってる子は（声かけを）するけど」という発言、「知らない子には言えんわ」の中にも表れている。

大人は、逸脱的な行為をなす見ず知らずの若者に対して注意した結果生じる可能性がある、暴力的な仕返しに対する不安に晒されている。それも、注意をなした大人にくる報復ではなく、「子どもかなんかに仕返しがきたら怖い」（Scene.3-18）という。「本当は注意しなきゃいけない」が、「自分家の子を守りたい」と願うため、大人は「注意したくても注意できない」という状況に陥っていることが伺える。

現在の大人は、逸脱行為をなす若者に対して、異端視していることは明らかである。しかし、異端視はするものの、明確な注意ができず、無視してしまっている。それでは、どのようにすれば、地域の教育力を高めることができるのであろうか。次節では、こうした結果を踏まえて、被調査者が考える、家庭、学校、地域のあるべき姿に対する提言をまとめていく。そして、逸脱行為をなす若者に対して、家庭、社会がどのように接していくべきかを提案していく。